幼稚園に子どもを通園させている母親の育児不安と児童虐待傾向

花田　裕子[1]・坂原美保子[1]・寺岡征太郎[2]

要　旨　母親の虐待行為のリスクレベルと育児不安との関連及び必要なケアについて検討することを目的に，幼稚園に子どもを通園させている141名の母親に調査を実施した．虐待ハイリスクの母親は，児童虐待行為尺度によるカットオフポイントで虐待群２名，虐待傾向群15名であった．育児不安ありと回答した母親は66名，育児不安なし75名であった．虐待傾向群，非虐待群両群に育児不安をもつ母親が同程度に存在していた．重要な育児支援資源としての夫との関係と関連についても検討を行い有意な関連があった（p=0.65）．児童虐待の増悪防止と発生予防のために啓蒙・教育の支援と共に認知へのケアの必要性が示唆された．

長崎大学医学部保健学科紀要 18(1): 5-8, 2005

Key Words　：　児童虐待傾，育児不安，母親

Ⅰ．はじめに

児童虐待の問題は，多くの先行調査やメディアからの情報によって，特別な家庭だけでおきているのではなく，一般人口の中に存在する問題として認識されるようになった．児童相談所への相談件数の変遷をみると，統計を取り始めた1990年度は1101件であったが，毎年約1000事例程度の増加があり，2000年の児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）施行後は24800件と急増している．2003年の一部改正（最終改正2004年12月）によって虐待を疑う事例の相談が増加して2004年度は32979件までに増加している[4]．このような顕在化した事例以外にも，潜在的な児童虐待が存在することも広く認識されている[4,5]．急激な相談件数の増加と潜在的なリスク家庭への支援の必要性から，一部改正された児童福祉法によって，2004年12月から市町村が児童家庭相談を実施することとなった．市町村は，2005年から実施される新子育て支援事業とあわせて，児童虐待の予防と早期発見・介入の役割を担うことが求められるようになる．これは，地域ぐるみの育児支援の環境を整備することを意味するが，子どもに関わる職種は多様であり，専門的なトレーニングを受けた人材の不足など多くの課題を抱えている．この様な状況において，看護職は虐待された子どものケアだけでなく，専門的な知識を活用して児童虐待の予防と早期発見のために母親への支援の一端を担っていく必要があるのではないだろうか．本研究は，幼稚園児を育児中の母親を対象として，虐待リスクのある母親の早期発見と適切な育児支援とケアを明らかにすることを目的としている．現在，得られたデータの解析過程であり，本論では対象となった母親の虐待行為のリスクレベルと育児不安との関連，夫との関係についても検討する．

Ⅱ．研究方法

1）対象：Ｉ市の２箇所の幼稚園に子どもを通園させている母親202名から回答を得られた152名から祖母・父からの回答と虚偽尺度として社会的望ましさ尺度(SDS)[3]８点以上１名を除き，回答に欠損のない141名のデータを解析対象とした．

2）期間：2004年９月より11月

3）解析方法：本稿では以下の２つの結果について明らかにした．

①虐待および虐待傾向：1999年に行われた首都圏一般人口における児童虐待疫学調査で使用された虐待行為尺度17項目を用いた（表１）．本尺度では，カット

表１．虐待行為質問項目

１．泣いても放っていく
２．食事を与えない
３．蹴る
４．大声で叱る
５．お尻を叩く
６．手を叩く
７．頭を叩く
８．顔を叩く
９．つねる
10．使って叩く
11．物を投げつける
12．傷つくことを繰り返し言う
13．浴室などに閉じこめる
14．家の外に出す
15．家に置いたままでかける
16．裸のままにしておく
17．噛みつく

1　長崎大学医学部保健学科看護学専攻

2　碧水会 長谷川病院 看護部

オフポイント13点以上が虐待群，10－12点を虐待傾向群，10点以下を非虐待群としている．この分類に準じて調査対象の，虐待行為得点を算出して虐待群，虐待傾向群，非虐待群数の分布を見た．②育児不安の有無：虐待群，虐待傾向群と非虐待群の母親の，育児不安あり群と育児不安なし群との関連を検討した．③夫との関係性：虐待群および虐待傾向群と非虐待群と「夫の関係」との関連はWilcox順位和検定を行った．

4）倫理的配慮

①対象の母親へ研究の目的およびプライバシーの保護，回答を拒否する権利，幼稚園名及び個人情報を保護することを文書にして質問紙に添付した．調査用紙の返送を調査への同意とした．研究計画は，長崎大学医学部倫理委員会で審査を受けた．

Ⅲ．結　果

首都圏一般人口を対象に行われた児童虐待疫学調査で使用された児童虐待行為と17項目の得点では児童虐待行為と17項目の得点（最高点24点）では，全体の平均得点は5.9点（SD＝3.1），13点以上の虐待群２名（13点１名14点１名），10－12点の虐待傾向群15名（平均点13.5(SD＝0.71)であった．虐待群２名を含む虐待ハイリスクの母親が15％存在していた（図１）．育児不安ありと回答した母親66名（46.8％），育児不安なし75名(53.2％）で，虐待群の母親２名は育児不安ありと回答していた．虐待傾向群15名の母親は15名中９名（60％）が育児不安ありで，６名が育児不安なしと回答していていた．非虐待群の母親124名で育児不安ありと回答したのは55名（44.4％），育児不安なしと回答したのは69名(55.6％）であった．育児不安なし群，あり群の両群に，虐待行為得点は，０点から９点まで広がりがあった（表２，３）．育児不安がある非虐待群の虐待行為得点は，９点１名，８点７名，７点10名と高めの得点者が存在していた（表１）．育児不安なし群でも，同様に９点４名，８点６名，７点５名と虐待傾向得点に近い母親が多く存在していた．虐待と虐待傾向群をリスク群として非リスク群と「夫とはうまくいっている」をwilcoxnの順位和検定で解析しp＝0.65と有意差があり非虐待群の方が夫との関係が良好であると認知していた．

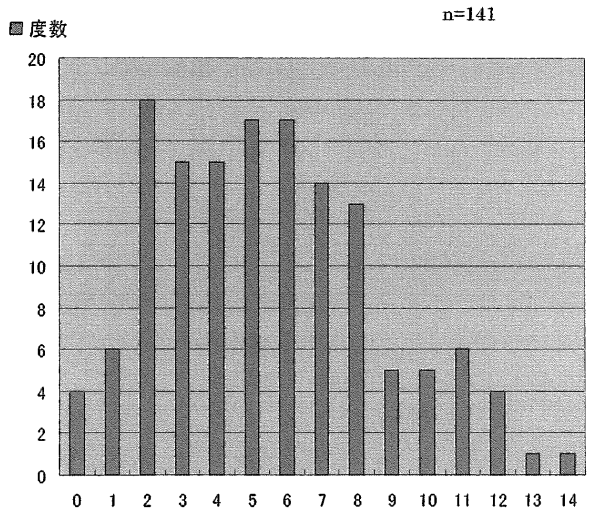


図１．虐待行為得点

表２．育児不安あり群の虐待得点分布

	得点	回答数
育児不安あり群	9	1
	8	7
	7	10
	6	10
	5	8
	4	8
	3	6
	2	5
	1	2
	0	3
		計 60

表３．育児不安なし群の虐待得点分布

	得点	回答数
育児不安なし群	9	4
	8	6
	7	5
	6	7
	5	11
	4	8
	3	9
	2	13
	1	3
	0	2
		計 68

Ⅳ．考　察

虐待群では２名とも育児不安を認知していて，虐待傾向群では15名中９名と60％の母親が育児不安を自覚しているが，40％の母親は育児不安を自覚せずに虐待的な養育行為を日常的に行っていた．育児不安を感じることがない理由として，母親のしつけに対する信念や自己の育てられた体験によって虐待的な行為への認識にゆがみがある可能性が考えられる．先行研究でも，虐待的なしつけをされた母親は，自分の被養育経験を認識できない，また母親が幼少期に早期の支援を受けていないと現在の支援資源に対して認知のゆがみが生じることが指摘されている[1]．育児不安をもっている母親が，現在なんらか

の育児支援を受けているかは本調査では確認できないが，育児不安が解決できない状態であり，効果的な支援を受けていないことが推察される．育児不安を認識している母親は，育児支援やケアの必要を認識しているが，身近な相談者である幼稚園教諭をはじめ誰か支援者がいるのかを，今後データの解析を進めて明らかにしたい．児童虐待は，支援がないまま放置されていると虐待行為が増悪するリスクが高いことは専門職の中ではよく知られている．虐待群と虐待傾向群は，早急な育児支援や母親のケアが必要であるが，育児不安を認識しているか，いないかでケアのアプローチが違ってくる．虐待群と虐待傾向群に対しては，子どもの発達や児童虐待の知識，育児不安に関連するうつ状態のトリアージとケアだけでなく，育児不安を認知していない場合は，認知の変容を促進するケア[1,2]も必要であり，幅広い専門的な知識とケア技術が求められる．虐待行為尺度は，カットオフポイントが設けられていて，今回はその得点によって虐待群，虐待傾向群，非虐待群としたが，対象者の得点は０点から14点まで分布していて，非虐待群でも９点，８点，７点の得点者は，０点や１点，２点の得点者に比べて，なんらかのストレスが加わった場合に虐待傾向範囲に増悪する可能性が高いといえる．虐待行為17項目は，かなり重篤な虐待行為が含まれているため，施設規模の調査では，カットオフポイントだけでなく，個々の得点と該当項目にも注意して見守っていく体制が虐待予防の観点からは重要である．育児不安の有無は虐待・虐待傾向群と非虐待群２群で有意差はなく，現在は非虐待群であっても母親へのストレス管理，育児支援の必要が示唆された．虐待群と虐待傾向群は，夫との関係にも問題を抱えていた．夫との関係の悪さがストレスとなり，子どもへの養育態度に影響しているのか，あるいは両者が関連なく存在しているのか今回までの解析段階では明らかではないが，育児不安，児童虐待と父親の育児参加との関連では，調査によって異なった結果が出ている．核家族が多い現状で夫は重要な育児支援資源であるが，夫との関係が悪いと協力して育児をしていくことは困難であり，育児ストレスを増悪させている可能性もあり今後更に文献比較も必要となる．

文　献

1）Brown, J, Cohen, Johnson, J, Salzinger, S: A Long Analysis of Risk Factors for Child Maltreatment: Finding of A 17-year Prospective Study of Officially Recorded and Self-Reported Child Abuse and Neglect, Child abuse & neglect, 22(11); 1998：1065-1078

2）Gara, M, Allen, L, Herzog, E: The Abused Child As Parent: The Structure and Context of Physically Abused Mothers' Perceptions of Their Babies, Child Abuse & Neglect 24(5); 2000：627-639

3）北村俊則．鈴木忠治：日本語版 Social Desirability Scale について，社会精神医学９(2)；173-180，1986

4）厚生労働省監修：平成17年厚生白書18

5）社会福祉法人 子どもの虐待防止センター：首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書．平成11年

Anxiety of child rearing and child abuse potential in mothers who have kindergarten child

Hiroko HANADA[1], Mihoko SAKAHARA[1], Seitarou TERAOKA[2]

1 Department of nursing, Shool of Health Ssiences Nagasaki University
2 Hasegawa Hospital